

氏名	橋本 由紀子		
博士の専攻分野の名称	博士（社会福祉学）		
学位授与の日付	2016年 3月 19日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
学位論文題目	開発と生活の質の理論枠組みの構築と実践 —インドの貧困層の精神的側面のニーズに関する研究—		
論文審査員	主査	教授	高橋 睦子
	副査	教授	小川 芳徳
	副査	教授	永見 邦篤
	副査	教授	正野 知基
	副査	教授	内海 成治（京都女子大学）

論文内容の要旨

1. 研究の背景と目的

1) 問題の所在

途上国における社会開発の目的「生活の質」の定義が不明確なまま、生活水準の向上、教育、医療、雇用の促進に焦点があてられる一方で、精神的側面の不安定さへの配慮が軽視されている。所得が増加すれば、途上国の貧困層の問題の大半が解決されるとの誤解があり、開発支援の重点はいまだにBHNに基づく生活水準の向上にある。しかし、インドなどの開発途上国では、経済発展とグローバル化の影で貧富の格差が広がり、不公平感やストレスなどの要因で、人々の精神生活の安定は脅かされているのが現状である。

2) 研究目的

本研究の目的は、次の3点である。

- (1) インドの貧困層の人々の精神的側面の不安定さを一連の調査で明らかにする。
- (2) 本論第一部で検討・構築したD-QOL指標に基づく調査により、貧困層の生活の経済的な改善が、精神的側面の安定に必然的に結びつくものか否かを検証する。
- (3) 貧困層の人々の精神的側面の安定を重視するD-QOLアプローチの実践として「タネプロジェクト」の提案を行う。

2. 研究方法

第I部：理論考察（理論の比較と指標の開発）

- (1) 人間開発アプローチと生活の質アプローチの比較をセンとQOL理論考察により行う。
- (2) 開発と生活の質アプローチ、D-QOL (Developmental Quality of Life)の理論枠組みを構築し、WHOの開発したQOL-100を基にD-QOL指標を提示する。

第Ⅱ部：フィールド調査と仮説検証

- (1) 社会的に不利な立場にある人々（バルネラビリティーを抱える人々）を対象にした一連の調査で、人々の精神的側面がいかに脅かされているかを明らかにする。(2) 第Ⅰ部で提示したD-QOL指標による調査から、本研究の仮説「貧困層の人々にとって、物質的生活状況の改善が、精神的側面での安定に必然的に結びつくとは限らない」を検証した。

第Ⅲ部：D-QOL アプローチ実践の総括・総合考察 調査に基づき、貧困層の人々の精神的側面の安定とエンパワメントを重視するネットワーク型 D-QOL アプローチの実践化タネ・プロジェクトを試案した。

3. 論文の構成

本論文は第Ⅰ部理論考察、第Ⅱ部フィールド調査、第Ⅲ部総括（D-QOL の実践化タネプロジェクトの提案）からなる。

第Ⅰ部 開発協力の展開と「生活の質」

序章 研究課題・目的

第1章 開発協力の展開

第2章 D-QOL 固有の視点—理論の枠組み

第3章 D-QOL アプローチ—操作の枠組み

第Ⅱ部 調査と実践

第4章 調査—ダラビ地区とタネ市における現地調査

第5章 インドの障がい者の D-QOL 調査

第6章 スラム住民のストレス度調査

第7章 女性のエンパワメントと D-QOL

第8章 スラム住民の D-QOL 調査

第9章 AIDs・HIV 患者の D-QOL 調査

第10章 スラム住民の D-QOL 経年調査

第Ⅲ部 D-QOL 考察と結論

第11章 調査・実践の総括と D-QOL 理論

第12章 結論 D-QOL の実践タネ・プロジェクト

4. 結論と今後の課題

1) 初期の量的D-QOL 調査結果からは経済的・物質的ニーズの充足と精神的ニーズの相関関係は高いという結果が出た。しかし、4年後の調査で、経済的・物質的ニーズ充足度が増しても、精神的ニーズ充足度は減少した地域や人々も多いことが判明し、本研究の仮説「経済的側面のニーズ充足が、必然的に精神的側面のニーズ充足につながるとは限らない」の証明ができたと考える。また、質的調査でも、急速な経済発展は人々の精神的側面を脅かす場合が多く、D-QOL の向上は単に経済的物質的支援のみでは達成できず、精神的側面への支援を重視すべきことが明らかになった。

2) D-QOL アプローチの実践の試案タネ・プロジェクトではNGO, ソーシャルワーカー、地域住民組織CBOの協働を主とする、参加型のホリスティックなアプローチを採用し、ネットワーク形態で、質的調査から、その有効性が示された。

3) D-QOL アプローチ実践は、地域住民の生活の質に密着した住民組織化、社会変革を起こす政策提

言のできる有能なソーシャルワーカーや NGO の活躍に期待できる。D-QOL 指標は、開発 NGO や国際協力プロジェクトの評価指標としても有効であると考えられる。

開発と生活の質は、発展段階で複雑に変容し、多様化している。アルコール依存、AIDs 問題、十代の非行問題などの社会問題の増加、ストレス要因の増加などにより、精神科医療費の増加が指摘されている。途上国の貧困層の D-QOL 向上のための支援は、精神的側面の分析を欠いた、客観的指標やハード面のみに焦点を当てた理念では、対応できない。D-QOL アプローチの固有の視点である vulnerability の除去と、同時に、制度・政策による社会開発の限界を認識し、センの潜在能力アプローチと補完的かつ独自の存在意義を持つ D-QOL アプローチの導入により、住民主体で、精神生活の安定と D-QOL 保障を実現できるようにソーシャルワーカーが支援を推進していくことは、重要な理念として位置づけられると思われる。

論文審査結果の要旨

1. 論文の内容

物質的側面とともに精神的側面から開発途上国での「生活の質」に注目し、3部から構成されている。まず第1部では、文献研究から開発と生活の質 D-QOL (Developmental Quality of Life) の理論枠組みの構築に取り組んでいる。第2部では、インドのスラムにおける経年調査データ分析に基づく考察を通じて、貧困やアルコール依存症など重篤なバルネラビリティーを抱える社会的弱者たちが、物質的・経済的な側面だけでなく精神的側面の安定とエンパワメントを必要としていることを明らかにした。第3部では、第1部と第2部をもとに、D-QOL アプローチの実践としてインド現地において「タネ・プロジェクト」を試み評価を行っている。

2. 評価

本論文は著者の長年にわたる「社会開発」と「インドの貧困・バルネラビリティー」研究の集大成であり、国際社会福祉研究に大きく貢献する研究として位置付けられる。膨大な調査データの集積はこの論文の強みでもあり、また同時に、明確な論旨との整合性を維持しつつ読み手に伝えることでの著者の力量が試されることになっている。「貧困その他のバルネラビリティーの生活状況にあっても人は物質面だけではなく精神面での安心や尊厳を必要としている」という本論文の結論は明らかである。ただし、この結論に至るまでの調査と論証の道筋は複雑である。理論考察、調査研究、そしてモデルの実践という三部構成そのものは妥当であるが、研究方法に関しては、インタビュー調査とアンケート調査の質的・量的調査を併用することの意義についての検討が明記されていれば、学術的な価値がさらに向上したと考えられる。社会的弱者への支援のありかたを当事者主体で研究している点で、インド社会であっても他の社会であっても、社会福祉学研究として極めて妥当と評価される。

3. 口頭発表（公聴会）ならびに口頭試問の評価

公聴会では本論文の内容を的確に時間内で発表でき、質疑応答では簡潔かつ明瞭な受け答えをすることができた。口頭試問では、本研究での「D-QOL」の定義付けと人間開発アプローチとの着目点の相違、現地調査結果の記載の適切さ、結論の妥当性等を中心に、社会開発・国際協力分野の専門家（学外）を含む5名の審査委員による試問が行われた。本論文のオリジナリティと特色とともに残された課題についても的確な認識があることが確認された。

4. 審査結果

本論文は博士論文に値するものと審査委員全員が一致して評価した。